

信州読書会 ツイキャスト読書会

課題図書 トルストイ 『ろうそく』

信州読書会では、毎週、ツイキャストをつかった視聴者参加型の読書会を開催しています。

信州読書会のメルマガ登録者は、課題図書の読書感想文を 800 字で書いていただければ、放送中に紹介します。
(募集要項はメルマガでお伝えします)

また作品に関する質問・感想などは、どなた様も、放送中ツイートいただければ、とりあげます

信州読書会 ツイキャスト <http://twitcasting.tv/skypebookclub>

『信州読書会』メルマガ登録はこちらから http://bookclub.tokyo/?page_id=714

今後のツイキャスト読書会の予定です。 http://bookclub.tokyo/?page_id=2343

『ツイキャスト読書会』音声のバックナンバーです。

<https://www.youtube.com/playlist?list=PLVj9jYKvinCsgP7jtFgzqxea6cgqd7mrf>

(各回の感想文は動画の下の説明欄に PDF へのリンクを張っております。)



第 75 回のツイキャスト読書会の課題図書は、トルストイ 『ろうそく』です。

読書感想文を提出して下さった皆さんありがとうございます。

『ろうそく』に見られる聖書理解

キリストの復活を祝うため誰もが神に感謝して食事と休息をとる復活祭に、あえて百姓たちに耕作を命じた管理人には、単に百姓たちを酷使してやろうという以上の考えがあった。それは彼らに祝祭日に労働させることで、罪の意識を植え付けること。管理人は、いかに自分を悪く罵ろうとも、その自分たち自身も自分可愛さに神に背いているではないか、という自責の念を百姓たちに与え、自分の支配力を強めようとしたのだ。神に対する罪の意識を宗教原理とするキリスト教において、このことは相当重たく各人の内面にのしかかるものだろう。(1)

だが、ミヘーエフは違っていた。彼はそれが自分の意志でないなら恐れることはないこと、神はそれが誰の罪であるのかお見通しであることを説くのだ。つまり彼は、罪の原因は行動ではなく心の在り方、信仰にあると理解しているのだ。(2)

ミヘーエフの心は、常に神の側にあった。彼はワシーリイが管理人を殺すことが仕方のないことと主張した際にも、神はそのようには示していないと説いた。ワシーリイが自分の考えを述べたのに対し、ミヘーエフは自分の考えではなく神の考えを示したのだった。(3)

タイトルであるろうそくは第一に生活に欠くことのできない照明であり、同時に宗教儀礼においても大きな意味を持つものだ。ミヘーエフの立てたろうそくの意味は間違いなく後者だ。復活祭の日、彼の肉体は労働していたが、彼の霊は神への感謝と祝福のうちにあった。

彼の行動とその意味が分かった管理人は、そこにミヘーエフの信仰を見て取り、その罪が自分に向けられているということを理解したはずだ。ろうそくの光はこの時、神の照らす真理の光であった。(4)

おそらく管理人は、ある程度は賢い人物だったと思われる。だからこそ農奴から今の地位になれたのだし、傍若無人な振る舞いを咎められずにいたのだと推測できる。そんな彼には、ミヘーエフの信仰の向こうに神の存在がありありと感じ取れただろう。これまで自分がおこなってきたこと、騙してきたことなどが、突然に神の前に明らかになってしまった。人は人を騙せても、神を騙すことはできない。この時以降、管理人は内なる地獄に生きることとなったことだろう。(5)

私たちもときに、人の行動の背後にある考えに気付かされた時、あるいは反対に、自分が行動とは裏腹に考えていたことを人に見透かされた時、魂が丸裸にされる思いをすることがあるのではないか。そうしたときに自分の考えや言葉、行動とを自ら肯定できるだろうかと深く考えさせられた。

(おわり)

追記:キリスト教的教訓としては、「人の尺度で物事をとらえるな、万事は神の示しに従え」「人は心の在り方(信仰)によって義とされるのであって、律法を守ることそのものが大事なのではない。同時に、罪は肉ではなく霊の側にあると知れ」ということが説かれていると思われる。一方で日本人としては、同じく農村的な信仰である「お天道様が見ている」の思想に近いものを感じた。

キーワード:「冒頭の聖句」「復活祭」「ろうそく」

- (1) 復活祭は「春分の日後の最初の満月の次の日曜日」なので、そもそも労働してはならない「安息日」である。また、復活祭前日までの1週間を「受難週(苦難週間)」と呼び、飲食などを節制した生活を送る。百姓たちは、朝の礼拝に赴いた後、体力が落ちている状態で耕作に出かけている。
- (2) ローマ書4章には「人は信仰によって義とされる」という考えが説かれ、ただ律法を守ることの無意味を説いている。ミヘーエフが「復活祭」に畑へでることを厭わなかったのはこの考えによると思われる。
- (3) 作品冒頭の福音の一節「悪しき者に抵抗うな(マタイ書5)」はここにつながっている。
- (4) ヨハネ書1章「光は闇の中に輝いている。闇はこれに勝たなかった。…すべての人を照らすまことの光があつて、世にきた。」
- (5) ルカ書6章には、神の国(天国)が信仰をもつもの(心)の中にあることを説いている。そうすると地獄もまた、生きている人の心に到来しうるのではないか。

『 消えない灯り 』

貴族の下男出身のミハエルは土地管理人となってから、農奴らをこっぴどくいじめ始める。農奴らは彼の横暴に耐えきれず、彼を殺そうと話し合うが、いざと管理人が現れると鷹を見た雀の如く逃げてしまう。キリストの復活祭であったある日、ミハエルは村長に村の者たちが自分の悪口を言うのではないかと確かめてこいと命令する。村長は大抵の農奴は口にするにも億劫なことを話していたといいながら、ひとりの農奴だけは復活祭の歌を口ずさむばかりだと言った。そして、その農奴がカラスキにかけていたろうそくの灯りがずっと消えないでいたことを聞いたミハエルは自分の負けだと言って震える。結局、彼は農奴の村を訪ねては事故で命を失うということで話は終わる。

最初この短い物語を読んだときは、あまりにも難解であったため、ネットで色々調べてみたら、「ミハエルのろうそく」という童話があった。神様はどんな小さな灯りでも見つけて我々を訪ねてくださるという話。子供のミハエルはろうそくを残して死んだが、彼のろうそくが息子を失った父親の元へ神の加護を引き寄せるということだった。

ろうそくはいつかは消える。また、風が吹いてもすぐ消えてしまうようなか弱い存在だ。そのろうそくが消えないでいるということは神の恵み被っていることに相違ない。それを見た「ろうそく」のミハエルは自分の負けであるのが分かる。

ろうそくはまた、世界中で行われるデモで使われるものでもある。か弱いろうそくがいっぱい集まれば、それは暗い夜を眩しく照らすような大きな光源と化す。ろうそくの灯りは抵抗、暗闇に屈しないと主張する弱者の抵抗なのである。農奴たちの心の中で灯された怒りのろうそくは、ミハエルの出現と共に跡形もなく消えてしまったが、神の教えに従い、信仰心というろうそくを灯した一人の農奴には、消えないろうそくという神の音声を聞こえていたのかもしれない。

でも、この世で消えないろうそくなんかは存在しない。ロシア帝国が滅んだのも、怒りのろうそくを持ち上げた民衆の血まみれの革命によるものであった。その良しあしはおいという、この世を一変させるのは、消えないろうそくの働きよりも、殺気溢れるろうそくの跋扈のよるものではないかという気がしてならない。

一人の地主でもあったトルストイがこの話でいいかかったのは何だろうか。彼が自分の存在を合理化するためにこの話を書いたとは思えない。生前農奴にやさしかったというトルストイ。彼が夢見ていた世界は一体なんだったろうか。

(おわり)

スミカズさんの主宰する 炭山 韓国読書会のブログとツイキャスです。

ブログ <https://ameblo.jp/shimogashiwa>

ツイキャス <https://ssl.twitcasting.tv/c:nindaranna>

「仕返しと正当防衛」

私はこの物語を読んで、以前「読書会」で扱った「二老人」に出てきた主人公エリセイを思い出した。エリセイも、今回の話の主人公の農夫も、共に光が射している。私はこの光はキリスト教の教えを信じる心だと思った。「二老人」のエリセイは「困っている人に手を差し伸べなさい」という教えを、「ろうそく」のピョートルミヘーエフは「仕返しを神は命じてはいない」という教えを忠実に守っている。だから二人共、徳のある老人の象徴として光が輝いたのだと思う。

「ろうそく」の話は、「悪人でも、人間が人間を罰する(仕返しする)ことは許されない」がテーマだと思う。この考えは、日本の場合、個人に限って言えばよく守られていると思う。正当防衛以外、仕返しは許されず、裁判を通して罪を罰する制度が国民から承認され守られている。トルストイが書いた当時のロシアの裁判はどうだったのだろうか？

「仕返し」に関しては、大それたことではないが、私は今までにした覚えがある。相手の行動に我慢できずにしてしまったが、事態は何も変わらなかったし、後悔と自分への嫌悪感だけが今も残っている。仕返しは心の苦しみを救うことはできないと思う。だから、ミヘーエフの言う「悪をもって悪を滅びそうとすれば自分に返ってくる。自分の魂が汚れる。」には納得した。

ただ、この話はミヘーエフの言った「悪人は報いを受ける。災難は負けている方がいい。そのうち災難の方が負ける。」の言葉通り、最後に悪徳管理人は酒に溺れ命を落としたが、現実にはそうならない場合も多い。解決には正しい法の裁きが必要であると思う。

ところで、現在キリスト教を信じる人が多い国で、仕返しではないかと疑いたくなるような行為「制裁」が国家間で起きているように思う。爆弾投下など武力行為そのものや、武力でなくても経済を通じた「制裁」が行われている。悪人でない人まで被害を受けている。これは正当防衛なのだろうか？

キリスト教のこと、国際法のこと、勉強不足で分からないことが多く、ああこんな時、水戸黄門がいたらスッキリ解決できると思わず思ってしまった。

(おわり)

「地には平和、人には親切。」

それだけ言ったきり、ミエーエフはただ黙々と犁を握って土を掘っている。

消えないろうそくは、実際管理人のミハイルは見えていない。それを報告した村老の言葉から、おびえながら何かを悟った。

ときどき憂鬱に襲われたのだがそれ以上のものは得られなかった。そして最後は、命を落とす。

ミエーエフや村人が管理人を殺したわけではないのに、どこか後味が悪かった。

悪人だから死んで当然、とも思えなかった。

お酒に溺れてしまう死に方に、それを止めることができなかった善良な奥さんに悲しい共感をしてしまったからかもしれない。小さい溜息がでた。

「おまえの知恵の及ばないことだ」

と自分の人生の可能性を否定してしまう。

自らの「気づき」は遅かったのだろうか。

目で見ていなくてもろくそくの明かりが見えた管理人のミハイルこそ愛をもって人と接し、心を入れ替えれば人生そのものも救われたはず。

気づいたのにあっけなく一年で死んでしまう結末に

「手遅れ」なこともあるのだという憂鬱が残る。

「地には平和、人には親切」

いい言葉だと思う。

土のない東京のアスファルトと、他人を見ないふりする都会人の群衆の中にもちゃんとすき間に善良な人はいる。

そう思って、そうありたいと思って、今日、わたしも犁を握って働こう。

この社会が管理されているのは重々承知だが、愚痴も悪口も、結局時間の無駄だから。

諦めじゃなく平和主義者のお手本として、トルストイの言葉を胸に刻みたい。

(おわり)

『地には平和、人には親切』

心が少し疲れると、トルストイの民話集を時々読み返します。

読むとすごく優しい気持ちになれるからです。

今回の「ろうそく」は短いお話の中に中身がぎゅうぎゅうに詰まっていて、それをひとつずつ紐解いていかないと理解出来ないような気がしました。

私が、一番心に残ったのは『地には平和、人には親切。』です。

もしこれが実践されれば、素晴らしい世の中になるのかなと思いました。

実践は難しくても、心の中にいつもその気持ちがあれば素晴らしいなと思いました。

悪い人には制裁を与えるという考えはすごく気持ちは分かるし、悪いことをしても平気で過ごしている人もたくさんいるから、自分が悪い奴に制裁を与えるのが正義だと思っている人もいるかもしれないけど、たとえ悪い人に対してでも、人間が人間を殺して相手の命を奪う事はあってはならないという事なのかなと思いました。

ミヘーエフが『人を殺さないいいことでねえ！血が魂にはねかかるだ』と、言っていて人を殺す事がいけない事だという意味はそこにあるのかなと思いました。

村の人たちは管理人をすごく憎んでいてすぐにでも皆で殺してしまうのではないかという感じでしたが、ミヘーエフのおかげで、誰も魂に血がはねかえる事もなくて良かったなと思いました。

でも、残念ながらろうそくの意味がよく分からなくて少しモヤモヤしました。ネットで調べると復活祭ではろうそくがとても重要だという事が書いてあって、ミヘーエフは、復活祭の集会に行っていないけどろうそくが消えずに灯されていたという事は、復活祭に行った事と同じように神様に認められたという事なのかな？とったりしましたがよく分かりませんでした。

きっと一番大事な所なのに…。

(おわり)

「わかりやすい悪人と、か弱き偽善者達」

管理人セミョーヌイチは人を人と思わない、管理人と言う権力の上に胡座をかく分かりやすい人でなした。これは物語の中のお話だけれど、実際嫌な上司がいたり劣悪な環境で働く人達は世の中に多い。

私がかつて勤務していた介護老人福祉施設では職場の待遇の不満から何人も同時に退職者が出る、なんてケースがあった。

この作中に出てくる農奴達の様に、独断論と懐疑論の2つに別れてしまい、日本の世俗の小さな老人ホームでは懐疑論者が多くなり、集団でやめるという行動に出たのだろう。

私は後者は自己重要感、自己効力感の低い人達だと感じた。

認められたい、私が辛い思いをしているのは権力のある人のせいだ！と。

スタッフが女性中心だった私の勤務していた職場では上役に対する文句だけではなく、ヒラ社員同士の陰口が横行していた。

もしかしたらろうそくの中の管理人を殺そうと考えていた農奴達の中でも諍いが起きて、喧嘩に発展して、農作業の効率が悪化してさらに管理人に鞭打たれる、なんて事態もあり得そうだ。

現実社会の老人ホームではそのしわ寄せが入所者にやってくる。

仏陀の言葉にもこんなものがある。

「実にこの世においては、怨みに報いるに怨みをもってしたならば、ついに怨みの息(や)むことがない。

怨みを捨ててこそ息む。

これは永遠の真理である。」

普段から神とか真理なんて意識して暮らしていないので、理解するのはさらに難しい。

例えば独断論であっても私は「地には平和、人には優しく」でありたいです。

それを子供にもわかりやすく説明するって難しいです、トルストイ先生。

(おわり)

『地には平和、人には親切』

ミヘーエフは言っていた。「他人の命を取るのは、いとたやすいことだが、自分の魂はどうだろう？」
百姓たちはみな管理人に労働を強いられ、骨まで吸い取られる日々を送っていた。
ミヘーエフは、復活祭に働けと言われたら行く、神様は誰の罪だかちゃんをご存知である、と言った。

この世に存在する不条理にどう対処すればいいのか。私は、ふだんから、不条理なことに遭遇するのをとても恐れて生活している。不条理なことは生活の日常にある。何かのとぼっちりを受ける時もあれば難を免れるときもある。どちらになるかは偶然の産物だ。

少なくとも自分は、「何事も辛抱だよ、兄弟たち」のミヘーエフの言葉のように、不条理を辛抱してきたつもりだった。けれどこの小説を読んで、自分があたかも悲劇のヒーローで、ことさら不条理な状況に置かれていながらも諦めずに立ち向かう日々を送っているような錯覚をしていたことに気付いた。

よく考えたら周りの人もみんな同じように不条理を身にまといながら生きているのだ。そしてとぼちちりを少しでも軽くできるように自分なりの予防線を張っている。時には軽微なとぼちちりを自ら引き受けることで、のちに降りかかる重大な飛び火を免れようとする人もいる。

消えないろうそくが何なのか、今の私にはわからない。

おそらくろうそくは自分の心の中に宿るものなのだろうと思う。けれど、自分自身のろうそくを認識することは、果たしてできるのだろうか？私の場合、自分のろうそくは見えないけれど、他者の姿を見てろうそくを感じることはある。(他者のろうそくに惹かれるがあまり自分を見失うことはしばしばある。)

自分のろうそくに気付く機会があるとすれば、一つ心当たりがあるのは「非日常」の出来事かも知れない。日常に埋もれていると知らず知らずに見失っているものが、非日常を通して呼び覚まされる、とてつもなく大切なもの。非日常に遭遇し、しばらく日常に戻れない状況にある人から、それを感じる。

そう思うと、自分にろうそくが灯る時というのは、とてもしんどい時かも知れない。払う代償は途方もないのかも知れない。人に愚痴をこぼしながらやり過ごしている日常の方がはるかにましなのかもしれない。

にもかかわらず、ただありのままの自分を包み込んでくれる他者を求める自分がある。そんなものはこの世に存在しないことはうすうす分かっているのに。

(おわり)

belouga さんのブログです。過去のコラムなども掲載されています。ぜひご覧ください。

『belouga のつれづれ』 <http://ameblo.jp/clearmandarin/>

『 管理人の智慧 』

この物語に登場する領地の管理人は、最初の5行でというより、タイトルだけで非道な悪人だとわかる。実際に読み進めてみても、人を苦しめる悪人の典型だった。でも、ふと疑問に感じたのが、「人を羨む心の強い男だったので、いつでも罪からはなれることができなかった。」(P117・12行)とのくだりだ。この男は善良な妻を持ち、金もこしらえ、暮らしに心配はないはずだ。おまけに農奴から管理人への抜擢もされ、どこに他人を羨む必要があるのか理解できなかった。任された土地は豊潤で、何も余計に搾取する必要のない条件ばかりだ。この管理人の非道の「源」は何なのだろうか？

すぐにわかるのが、ワシーリィのように分かり易く反発する農奴には、それを喜ぶかのごとく非道を重ねる。村老にスパイをさせてまで、自らを悪く言うものをあぶり出し、まるで非道の理由を探しているかのようだ。それに呼応して農奴たちは管理人を殺すのも「神のいいつけ」だと正当化する。非道のスパイラルだ。しかし、ピョートル・ミヘーエフの悪をもって悪を滅ぼすのではなく、ただ神を忘れなきやいとの信念に怯んでしまう。

ピョートルは自らの信念どおりに、復活祭の日の無茶ぶりの耕作にも淡々と応じる。但し、復活祭の唄と消えないろうそくを携えて。

私が驚いたのは、そのピョートルの行動に管理人が打ちのめされたことだ。さらに自らの敗北を認め、これから降りかかる災難から妻を逃がそうとする。管理人は神が誰の罪か知っていることも、神を忘れてはいけないこともわかっていたと私は感じた。だからこそ、妻に「おまえの知恵には及ばないことだ。」と遠ざけた。彼は「智慧」が何か理解しているのだと思う。ピョートルと管理人は正反対ではなく「裏表」なのだ。

「羨む」とは「心(うら)病む」ともいうらしい。(Weblio 辞書より)本当にしんどかったのは、非道を行うしかない管理人の方だったかもしれない。

管理人は消えないろうそくに何をみたのだろうか？もし、神の意志を感じたとすれば、それは自らの心の内を認識したということだろう。そして、ピョートルによって認識したがために、自ら自滅するしかなかった。

(おわり)

岡山読書会のブログです。過去のコラムなども掲載されています。ぜひご覧ください。

<http://ameblo.jp/kaoru8913/>

スカイプで個別読書を主催されています。ご興味ある方はブログからお問い合わせください。

ツイキャスのチャンネルはこちら <https://twitcasting.tv/yuuki27144>

「智慧の完成形」

『人はなんで生きるか？』では、落ちてきた天使、ミハエルが、長靴を注文してきたお金持ちの大男見て、《一年先のことまで用意しているが、この夕方までも生きていられないことは知らないのだ》と気づいた。そして、神の『人間に与えられていないものは何か？』という質問の答えに思い至った。

『ろうそく』の荘園管理人の名前は、ミハエル・セミョーヌイチ。まるで、ミハエルが、天国に帰れず、セミョーンの家で養子になったような名前だ。

(引用はじめ)

人間には、自分の肉体のためになくてはならないものを知ることが、与えられていないのです。

Не дано людям знать , чего им для своего тела нужно.

『人はなんで生きるか？』岩波文庫 P.50

(引用おわり)

「ろうそく」とはなにか？ これもやはり、人間の肉体になくてはならないだが、知ることが与えられていないものだ。

管理人は、元天使だ。人がなんで生きるかを悟らずに、そのまま人間になってしまった。

その彼が、人間の知恵の及ばないものに、ようやく気がついたのである。

長靴を注文した大男は、「ろうそく」に気づかなかったので、あっけなく、死んでしまった。管理人は、会得したものがあつたので、罪の重さを自覚し、ふさぎ込んで死んでいった。

本来なら、この管理人は、天使として、天井を突き破る火柱とともに、神のもとに帰るはずだが、もう、手遅れだった。すでに、彼は、天使ではなく、どこまでも人間だったから、どこまでも普通の人間として死んだのである。

人間に与えられていないものは、智慧の完成形だ。それは実体ではない。般若心経の『般若波羅蜜多』とは、人間に与えられていない智慧の完成形を、表しているそうだ。

「ろうそく」に何も灯らなければ、この世は無明である。

餓鬼道であり、畜生道である。

人が人を傷つけ、殺し合い、共食いする苦の娑婆だ。

娑婆とは別の次元には、智慧の完成形としてのろうそくの灯りがある。信じなければ見えない。

実体のないものを信じるのが、智慧の実践段階である。

(おわり)

『信州読書会』メルマガ登録はこちらから http://bookclub.tokyo/?page_id=714
今後のツイキャス読書会の予定です。 http://bookclub.tokyo/?page_id=2343